法隆寺・正倉院宝物図絵　―某家旧蔵明治期資料を中心に―

加藤　晶*

要　旨

本稿では現在個人所蔵になる法隆寺および正倉院宝物に関わる約六一点に及ぶ図絵・拓本類を紹介し、若干の考察を試みた。まず本資料の概要を述べ、資料中に名前が頻出する歴史家として著名な小杉榲邨と本資料の関連性について考察した。本資料の大半が正倉院宝物と法隆寺献納宝物であることから、小杉がそうした宝物に興味を寄せていたことが知られる。また小杉にちなむ「事件」との関連性についても触れ、更に資料中に名前の見える町田久成と「壬申年八月」の墨書からいわゆる「壬申検査」についても述べた。

本資料の収集・作成に小杉がどこまで関与したか定かではない。一部の模写は画家に依頼していることもあり、拓本作成者についても不明点が多い。だが小杉の幅広い蒐集から考えるに、これらの資料も小杉の手によって集められた可能性が高い。

キーワード：①正倉院御物　②法隆寺献納宝物　③社寺宝物調査　④小杉榲邨

一、資料の概要

本資料は正倉院宝物の他、法隆寺献納宝物や東京国立博物館所蔵作品の拓本、または模写や復元図といった図絵集である。約六一点の内訳は正倉院宝物関連が二六点（図絵二四枚、一幅、一巻）。法隆寺献納宝物関連が二三点（図絵二一枚、一巻、一冊）。東京国立博物館所蔵品関連が二点、詳細不明品の図絵が一〇点である。詳細な作品名などは記されていない。

正倉院宝物中では、中倉に収蔵される「正倉院文書」の『続集別集』所収文書などの模写（1-8～1-12）（図2、3）などが複数見られる。実物大のもの以外に、北倉の「鳥毛立女屏風」の女性の顔部分（1-2～1-7）（図1）、南倉「銀壷」の狩猟文（1-17～1-20）など特定の箇所を拡大したもの（図5）、また明治五年（一八七二）に行われたいわゆる「壬申検査」との関わりも見られる。「正倉院御保存琵琶撥皮図」（2-25）は

令和２年９月15日受理　*文学研究科文化財史料学専攻博士前期課程　在学生

二つの琵琶の捍撥部分を模写したものであり「明治五壬申年八月　従五位町田久成寫」（図8）と「明治五壬申年八月　秦法英寫」（図9）とある。本資料中の「正倉院保存古物図」（7-51）においては、尺八（図16、17）と箜篌の装飾一部分を模写したもの（図18）琵琶撥らしきものの模写（図19）が描かれている。

法隆寺献納宝物の図絵中では拓本が多く、模写の他に輪郭線のみを写して拓本と組み合わせたものも見られる。また巻子装にまとめられた一巻には、外題に「正倉院御物模写」とあるにもかかわらず、実際には法隆寺献納宝物の模写であるなど齟齬がある。冊子状の御物一覧は、法隆寺献納宝物の一覧とでもいうべき小図の集成であり（図14、15）、鉛筆で描かれた上に墨書きがされている。その他は、東京国立博物館所蔵作品の拓本と作品不明の資料である。個々の資料についての詳細は、末尾の目録にて挙げる。

二、小杉榲邨について

ここでは本資料の各所に度々名前が登場する小杉榲邨について述べておきたい。まずは小杉榲邨の略歴を記す。小杉は明治時代の国文学者として知られる。天保五年（一八三四）十二月三十日に阿波（現徳島県）で生まれた。小杉家は代々続く阿波国蜂須賀家の陪臣で、父小杉明真は西尾氏の家臣であった。明真は和漢の学に通じ榲邨にも教育を行なった[1]。十二歳で寺島学問所に入り漢学を学び始める。

元服後は西尾志摩に仕え、安政元年（一八五四）にはともに江戸へ渡った。安政四年には古学館で国学を学び、小中村清矩や黒川春村らとの交流もあった。江戸より帰藩後は池辺真榛に学んだが尊王攘夷運動にも加わり、西尾氏邸内に一時幽閉されこともあった[2]。維新に伴い復権すると長久館の国学教授となり、『古事記』『令義解』『万葉集』を講じた。

明治七年（一八七四）、教部省に、明治十四年からは文部省に出仕し『古事類苑』の編纂に従事した。明治十五年には東京大学講師、明治三十二年には東京美術学校教授に任じられ、その他に帝国博物館監査掛なども歴任した[3]。古典の他に父から詠歌や物語を学んだためか、古美術や書、和歌にも優れ御歌所参候なども務めた。明治四十三年（一九一〇）三月二十九日に七十七歳で死去した。

著作には『有職故実』『徴古雑抄』などのほか、「正倉院文書」の調査による写本の製作にも携わり、小杉本として今も残されている。また研究の参考として古文書から図画まで幅広く書写を行い、資料の蒐集にも力を入れた。古文書をはじめとした書物のほか、絵画や拓本、仏具など多種多様な分野の作品を集めたとされる[4]。

三、正倉院宝物・法隆寺献納宝物の流出事件

さて、小杉が正倉院宝物あるいは法隆寺献納宝物との関わりがあったことを示す事件がある。ここでは事件について東野治之氏の著作[5]を

もとに簡単に述べる。

この事件は小杉榲邨の養子である小杉美二郎が大正五年（一九一六）に榲邨の所蔵していた様々な品を売却したところ、その中に正倉院宝物や法隆寺献納宝物が含まれていたという事件で、公になった理由は骨董商との仲介を担った遠閑田政平（もと正倉院御物整理掛）が暴露したためであり、大正六年（一九一七）三月十三日に『東京朝日新聞』『時事新報』『東京日日新聞』で報じられている。

東野氏の指摘する様に、当時の新聞記事という性格からして完全な事実とも言い切れないが、旧蔵品目録に使用された用語から専門性の高さ、正倉院御物整理掛で正倉院御物修理に深く関与していた遠閑田による暴露という事実から、正倉院宝物などが売却された可能性は高いと言える。[6] 売却品の購入先については某伯爵家が絡んでいるなど報じられたが、小杉に縁のある蜂須賀公爵家含め多数の関係者が購入または関与を否定している。[7]

東野氏は正倉院宝物の流出自体は小杉の事件以前から起きていたと考えられており、勅封であった為に正倉院宝物が残り続けてきたという当時の論調への影響が懸念されたこともあって、学会・官界において大きく取り上げられることも無かったとされる。[8]

ここで述べておきたいのは小杉榲邨が売却のために宝物を収集していたわけではなく、あくまでも息子の美二郎が売却したことである。後述するように小杉は正倉院との関わりがあるだけでなく、古文書類の書写のみならず蒐集活動も活発に行っていた経緯から宝物を手元に置いていた可能性がある。しかしそれも自身の研究のためであったとも考えられ、また当時の研究者の資料に対する認識も現代とは異なることを留意しなければならない。

四、小杉榲邨と壬申検査の関係

本資料が壬申検査との関連性が高いことは既に述べたとおりであるが、小杉が壬申検査と直接的な関わりがあったかは不明である。しかし資料中に名前が見える町田久成とは両者ともに帝国博物館（現東京国立博物館）に在職していたという共通点が見られる。町田は壬申検査の総責任者にして初代東京国立博物館館長となっている。ただし二人にそれ以上の接点があったのかは定かではない。

町田と同じく壬申検査において重要な人物となる蜷川式胤と小杉の接点については、明治七年（一八七四）九月二十五日に正倉院の再開封が行われた際に接触があった可能性がある。小杉が初めて正倉院の調査に携わったのも教部省に入った同年であり、湯之上隆氏はこの時の調査については詳細不明としつつも、東大寺大仏開眼会用の舞楽衣装の縮尺図を巻子本にした「東大寺所保存装束図式」の製作時期[9]と両者ともに調査の時期が九月であること、小杉は原品を見て縮尺図を作成したということから、再開封の際に蜷川と接触があった可能性を指摘している。[10] また明治八年（一八七五）十二月には教部省からの派遣で小杉榲邨・栗田寛・大沢清臣ら三名で正倉院文書の調査を行ってい

る。[11]

なお小杉榲邨の帝国博物館の在職期間は明治二十二年（一八八九）からで、同二十三年（一八九〇）から三十三年（一九〇〇）まで臨時全国宝物取調局に在籍し、調査を行っている。[12] 一方、明治十一年（一八七八）には、法隆寺宝物が皇室に献納され、それらが博物館に移納されたのは、上野に本館が建設された明治十五年（一八八二）[13]である。つまり小杉の博物館在籍時には既に今に言う法隆寺献納宝物として収蔵されていたことがわかり、壬申検査に携わらなかった小杉も一部の法隆寺宝物に接する機会があった可能性が考えられる。

おわりに

以上、本資料について若干の考察を述べた。個々については以下の資料目録を参照されたい。

本資料は明治期における正倉院宝物等の調査資料の一つであり、名前が度々登場することから、小杉家が旧蔵していた可能性も考えられる。また資料元の作品自体が小杉の勤めていた東京国立博物館収蔵品であるものが二五点と全体の半分近くを占めている。

しかし個々の資料が小杉自身の手によって模写や拓本を行ったかは定かではない。資料中の文字から、別人の模写と考えられるものもあり、拓本も全て本人が行ったか不明である。また原資料が不詳なものもあるため、今後もさらなる検討が必要である。

資料目録

凡例

一、以下ではそれぞれの資料について概要を説明する。作品名に付した資料番号は表中のもと一致する。

一、書かれていた墨書は短文であれば「　」内に示し、長文の場合は段落を変えて記述する。

一、資料番号2-25㋐の長文三行目、3-44、5-48の和歌部分、7-51見返し部分と㋓の長文の翻刻については、奈良大学村上紀夫教授のご教示を賜った。

一、正倉院宝物関係

①図絵　二四枚

資料番号1-1　木画紫檀棊局

縦横二十紙を継いだ原寸大の木画紫檀棊局の模写。盤面と側面だけでなく、亀とスッポンを模した引き出し部分も上・横・斜めから見た状態を描いている。碁盤の目から側面、畳摺部分の文様まで細密だが、側面の木画である人物、鳥獣、草花等は省略されている。

資料番号1-2～1-7　鳥毛立女屏風

鳥毛立女屏風から女性の顔、または腕までを模写したもので全六図（図1）。第一扇から第六扇まで。写真上段右から第一扇、第二扇、第三扇。下段右から第四扇、第五扇、第六扇。第三扇のみ紙が四角で腕全体を含めた模写である。

資料番号1-8～1-12　「大大論戯画」「鏡背下絵」ほか（『正倉院文書』「続

修別集」第四十八巻）

続修別集の第四十八巻、第一紙から第四紙までの模写、全五図（図2、図3）。1-9には付箋が付属しており、「経論書写生の落書きの画なり　次の小杉氏の説明を見よ」、1-8左端に、

右東大寺文書中ノ一葉ナリ當時衣服ノ制有可□者菅政友カ
獲ル□ヲ以テ明治八年八月十九日栗田寛傳寫ノ一紙ヲ借テ守
住貫魚ニアトラヘテ模之
貫ギョウ　明治八年十一月八日　　小杉榲邨
カン

とある（図2）。栗田寛とは明治期の歴史学者であり、小杉と同じく明治八年十二月の教部省による正倉院文書調査に派遣された内の一人である。守住貫魚は明治期の画家で阿波出身。後に帝室技芸員となる。貫魚の左に鉛筆でルビと貫の字が振られているが、付箋と同じく後筆である。

資料番号1-13・1-14　吹絵紙

第十六号「紅葉」（図4）と第七号「藍」の模写。第十六号は茶色、第七号は墨の点線で描かれる。両方とも右端に「正倉院御物吉備大臣持帰品　唐紙吹画」とある。

資料番号1-15～1-20　銀壷　甲・乙

銀壷　甲・乙合わせて六図。1-15は銀壷の文様部分を縦一列分だけの模写と、底面の刻銘部分の拓本を印刷物にしたもの。右上には「全體ノ一分を摹シテ文様ノ位置ヲ示ス」、右下には「底面歎識」とある。左下には桜井の印捺される。

1-16は「銀壷　甲」の彩色された全景模写（図6）の印刷物。右端に、

銀壷　高一尺四寸圓径二尺四分口径一尺三寸九分厚一分二釐
縮図二分□一

と桜井の印（1-15と同じもの）、そして「桜井香雲蔵」と書かれている。桜井は明治十七年に博物局の名によって法隆寺金堂壁画を模写した大阪出身の画家である。

拡大模写（図5）は甲・乙から二つずつ採った文様であり、茶色の線以外に頭や腕には上から黒い線でなぞられている。また描き直しや紙が足りない箇所には別紙を継いで描く。

資料番号1-21～1-24　密陀絵盆

密陀絵盆第二、十二、十三号の模写で全四図。1-21は背面の模写のみで文様が一部描かれておらず、何号を指すか不明。1-24（図7）と1-22は模写の周囲に薄く円が描かれ、1-23は墨で太く円を描く。1-21は赤、その他は黒と黄色で描く。

資料番号2-25　②「正倉院御保存琵琶撥皮図」一幅（二作品含む）
全長（本紙のみ）六〇・八×四四・一センチメートル
㋐楓蘇芳染螺鈿槽琵琶　第一号

㋑紫檀木画槽琵琶　第二号

二種の琵琶捍撥絵の模写が一幅に収載されている。外題下に「秋圃蔵」、そのすぐ下に付箋で「貴重（子写し）要愛蔵　時なし　いつでもよい」とある。模写の横には町田と秦による模写と記されているが、『奈良の筋道』の「壬申検査」について記した個所に、「昨日写し残り琵琶、町田・秦・冨田写生す」と見えるところから、[14]両者が壬申検査の際に琵琶を模写していたことは確実である。

ただしこの資料は付箋に「子写し」とあることから、模写図を更に写した資料である可能性が高い。次に収載されている二作品について記す

㋐は楓蘇芳染螺鈿槽琵琶第一号の捍撥部分を原寸大で模写したもの（図8）。右側に、

明治五壬申八月　従五位町田久成寫　廿日ニ筆ヲ起廿二日卒業

左側上には

聖武帝御遺愛御琵琶撥皮之図

と記し、その下には、

冠ヲ着舞フタル童子ノ衣ハ朱ヲ甚タ濃クシタルナリ

とある。

㋑は紫檀木画槽琵琶第二号の捍撥部分を原寸大で模写したもの（図9）。右側に「撥皮」、左下に「明治五壬申年八月　桊法栄寫」とあり、町田と共に琵琶を模写した秦法栄のことと思われる。

二、法隆寺宝物（現法隆寺献納宝物）関係

①図絵　二一枚

資料番号3-26　玉帯残欠

玉帯残欠の拓本。格子状に組まれた箇所を朱線で縁取っている。「真珠瑠璃玉荘」二条のいずれかだと思われるが判別不明である。

資料番号3-27～3-34　蓬莱山蒔絵袈裟箱

蓬莱山蒔絵袈裟箱の拓本で、全八図。身の底面と側面、他は蓬莱山と鳥の文様部分のみの拓本である。3-29（図10）は拓本だけでなく模写の鳥が描かれた紙片があり、紙の縁部分二か所が拓本に貼付されている。3-31～3-34は側面拓本で鳥文様部分のみを拓本している。その内の3-31は一部欠けており、ほか三つと比べても拓本に濃淡がある。

資料番号3-35～3-38　木画経箱

木画経箱の拓本で、3-35・3-36は側面、3-37は蓋表、3-38は底面部で全四図。3-35（図11）は拓本の裏に別作品とおぼしき模写の一部が残る（仏像か）。

資料番号3-39・3-40　尺八

尺八の拓本と輪郭のみの模写。拓本は朱線で縁取り、模写は細い線で描かれる。3-40は拓本のみだが3-39は拓本が二つと模写が一つ描かれている。

資料番号 3-41・3-42　栴檀香

栴檀香の拓本で輪郭を朱線で縁取っている。3-41の右下には文字のみの拓本もあり、付箋の片面に「切断されし所は豊臣秀吉がきりとりたるものとか?云われたるものなり」と書かれ、もう一方の面には、

この鐘墨で写したものは御物の（ツリガネズミ）

「蘭奢待」印度渡来の香木なり、文子を分

解すると「東大寺」となる（裏）

とある。書体から資料1-9の付箋と同一人物が書いた可能性が高い。付箋に「蘭奢待」とあるが、正倉院宝物中の黄熟香（蘭奢待）ではなく、誤記である。

資料番号 3-43・3-44　白檀香

白檀香の拓本。栴檀香と同じく朱線で縁取っており、3-44には切り取られた跡と、右下に、

□木松様

本郷真砂町三十七番地

先　御手□之上　有かたく

拝啓昨夜者参上（×仕）之節、御馳走ニ相成、難有御礼申上候

出当番

陳者明日日□□□座ニ候得とも博物館出番ニ相当り

小生休暇相成りもし

候ニ付、明後二日モシ御閑暇なれ■■りニ相成

存候得とも

亀井戸辺迄御同道致被下度、此段如何哉御伺

申上候、明日帰りかけ御伺申上候

否

とあることから、博物館または関係者による手紙の下書きだと思われる（図12）。この文章のみ他の付箋や文字との書体が異なること、手紙の下書きという内容からみても、拓本後に書かれたものではなく、反故紙を拓本用紙として再利用したと推測できる。3-43の拓本下には小さく仏像の頭部が描かれる。

資料番号 3-45・3-46　鋸・鎌

3-45は鋸の全体、3-46は鎌の刃部分の拓本。鎌は柄が取り外された状態で拓本されたと思われる。また鎌の拓本右上には小さく「法隆寺」と墨書がある。

資料番号 4-47　②法隆寺宝物模写　一巻（七作品含む）

全長（本紙のみ）二九・五×八三九・五センチメートル

外題に「正倉院御物模写」とあるが誤記で、内容は法隆寺宝物（現法隆寺献納宝物）であると考えられる。一巻に幡垂飾、金銅小幡、瑞花蝶鳥金銀絵漆皮箱、草花蝶鳥金銀絵漆皮箱、不明品を含めた七点の模写、拓本を収める。以下に収載される作品個々について記す。

㋐不明（淡緑地輪繋文錦裂か）

淡緑地輪繋文錦裂の一部を模写した可能性がある。彩色途中だったのか、一部が白く塗られている。

㋑・㋒幡垂飾　金銅装唐組垂飾二条

㋑は拓本と模写を組み合わせた図で付属金具部分は拓本、布部分は模写である。布の一部は、用いる糸の配色についても詳細に記している。金具部分も一部に模写がある。㋒（図13）は彩色された復元図で、付属金具も全て付けられた状態で描かれる。

㋓金銅小幡

二つある小幡の内、第一旒の拓本で一部欠損している。第四坪から第七坪は反転状態で拓本が採られる。

㋔不明

文様部分の拓本と模写。文様部分の模写と模写した上から拓本を重ねたものがあり、拓本後に赤で所々に文様ごとの色を指定している。

㋕不明

㋔の側面にある拓本。表裏同形と思われ詳細不明ではあるが琵琶撥と推測される。片面は輪郭線のみで、拓本された原資料は楽器だったと考えられる。

㋖・㋗瑞花蝶鳥金銀絵漆皮箱

㋖は箱の蓋表、㋗は側面の模写である。㋖の右端には「法隆寺所蔵太子所用革文庫紋様」の文字がある。蓋表の四隅と側面部分の一つには模写の下に薄く拓本が採られている。

㋘・㋙草花蝶鳥金銀絵漆皮箱

箱側面のみの模写で、一部拓本が採られている。

資料番号5-48　③御物一覧　一冊

全十六枚で構成された冊子本で約二四一図（図14、図15）。法隆寺献納宝物が一枚ごとに描かれている。種類ごとに分類されて描かれているものもあるが、無秩序に並べている場合もある。用紙内を二段もしくは三段に分け、その上に並べ、斜め上から見たような構図で描かれている。裏側に右から、

みよし野ハ山もかすみて白雪乃ふりにし里に春はきにけり
ほ乃〳〵と春こそ空にきにけらしあまのかく山霞たなひく

と和歌が二首続けて鉛筆書きされている。左右ともに『新古今和歌集』にある和歌で、右は攝政太政大臣、左は太正天皇によるもの[17]である。

三、東京国立博物館所蔵、保管品　図絵　二枚

資料番号6-49　片輪車蒔絵螺鈿手箱

蓋表と側面の拓本。蓋表は全体だが側面は文様部分のみで拓本がほ

とんどない部分がある。

資料番号6-50　梅蒔絵手箱（静岡県三嶋大社寄託品）

蓋表の拓本。他の拓本と比べて細かい文様や全体図がはっきり分かるような拓本となっており、右端に「伊豆國三嶋神社蔵櫛笥蓋表　平目金彩地平蒔画梅花文字銀カナ貝」とある。

資料番号7-51

四、正倉院保存古物図　一巻（五作品含む）

全長（本紙のみ）二六・八×二六九センチメートル

斑竹尺八、小枝付笛、不明品を含む全五作品が収められる。現時点で収載される図に正倉院宝物に該当するものは認められないものの、『壬申検査社寺宝物図集』（東京国立博物館所蔵）第十巻には記録されている。見返し部分に、

この模写本は久成法師か蔵喜な
りしを没後余か秘架に帰す
小杉榲邨
（印）

とあり、小杉の名前と印がある（図16）。印は大沼宜規氏の論中にある図を見ると[15]小杉の使用していた印と同じと考えられる。以下に作品個々について記す

㋐・㋑斑竹尺八

斑竹尺八の模写。表・裏・側面をそれぞれ模写しており、㋐は輪郭線のみで（図16）右下には茶色の太線があるが、模写の彩色に使用した色と思われる。右上には「東大寺横笛□」、中央には「東大寺」のほか「長壹尺二寸九分」「径七分四厘強」「径七分強」と寸法が記される。㋑（図17）は彩色されたものが各三管ずつ描かれ、㋐と同様に寸法を記す。

㋒小枝付笛

尺八の彩色された模写。表・裏・側面をそれぞれ模写しており、「長壹尺二寸九分七分」「径七分弱」「径六分四厘」と寸法が記される。

㋓不明（箜篌の一部か）

鳥と花の文様を組み合わせたもの（図18）。黒地に文様が模写されており、文様の黒ずみも部分も表現されている。左下に、

後に破残零良を取りあつ
め試して、箜篌の一部
分なることを発明す

とあることから、おそらく破損した箜篌の装飾部分の一部を集め、復元してから模写したものと思われる。

㋔不明（琵琶撥か）

右上に「琵琶撥」とあることから、おそらく一つの琵琶撥を表・裏で模写、彩色したもの（図19）であろう。側面・上・下から見た図が中央に描かれるが彩色は施されていない。

また最後には印が上下二つあり、こちらも小杉の使用していた印と酷似しているが、園にあたる箇所が若干異なっている。[16] 下の印は不明。

五、原資料不明品　図絵　一〇枚

おそらく正倉院宝物や法隆寺献納宝物、それらに関する作品と考えられるが原資料が判明していないものである。

資料番号8-52～8-54　天蓋模写

天蓋の模写。すべて彩色されており、異なる天蓋である可能性が高い。8-52は天蓋の紐の色が白、紫、緑で構成されているものと黄、橙、緑で金具が付属するもの二種類が描かれる。布部分は朱色で薄く輪繋ぎ文様が描かれる。

8-53は天蓋全体が赤、紐は黄色で彩色されているが、紐部分の緑の文様は途中までとなっている（図20）。8-54は紐以外の全体が彩色され、右下には文様が一つだけ描かれる。

資料番号8-55・8-56　壁画模写

壁画の彩色模写（図21）。8-56の付箋に、

大英博物館蔵の

アジャンター壁畫の一部を模したるものを

再複写したもの断片なり（裏）

とあるが、現状で確認できない。おそらく他の壁画の模写だと考えられる。

資料番号8-57　天平時代貴族室内図

聖武天皇と思われる人物を中心とした「室内図」で多数の正倉院宝物が飾られている（図22）。裏面に、

聖武天皇

天平時代貴族室内図

とあることから、聖武天皇の宮廷内の想像図と思われる。

資料番号8-58　模写

何らかの残欠部分模写と思われる。五図描かれており、二図は描きかけの状態となっている。

資料番号8-59　拓本

形状からみて箱形の上面と思われる。文様部分のみを拓本している。

資料番号8-60　拓本

拓本の下に線が引かれているが、資料の作品とは別物と考えられる。右上は切り取られており、全体的に文様が途切れた状態で拓本が採ら

れている。

資料番号8-61　拓本

上面の拓本。箱形の輪郭線あり。全体ではあるが特に四隅や中央など文様が濃く出る部分のみの拓本である。

注

（1）上田萬年、芳賀矢一校閲・大川茂雄、南茂樹編『国学者伝記集成　下』復刻（東出版、一九九七年）三八四頁

（2）長谷川賢二著、徳島県立博物館編『郷土の発見―小杉榲邨と郷土史研究の曙』（徳島県立博物館、二〇〇八年）三〇頁

（3）注（1）三八六頁

（4）注（2）三〇頁

（5）東野治之「小杉榲邨旧蔵の正倉院及び法隆寺献納御物―その売却事件と鴎外の博物館総長就任」『大和古寺の研究』所収（塙書房、二〇一一年）三六四頁

（6）注（5）三六五頁

（7）注（5）三八五頁

（8）注（5）三七五頁

（9）湯之上隆「小杉榲邨の蒐書と書写活動―正倉院文書調査の一齣」『日本中世の政治権力と仏教』所収（吉川弘文館、二〇〇一年）二六六頁

（10）注（9）二六七頁

（11）注（9）二六八頁

（12）注（1）三八五頁にはこのように記載されるが、大沼宜規著、日本近代史研究会編「小杉榲邨の蔵書形成と学問」『近代史料研究』所収（日本近代史研究会、二〇〇〇一年）一〇頁には在職期間が明治二十一年（一八八八）からで、同二十四年（一八九一）から同三十三年（一九〇〇）まで臨時全国宝物取調局に在籍。また三輪紫都香「臨時全国宝物取調局の活動とその影響　博物館とその周辺の動向から」『お茶の水史学』所収（読史会、二〇一六年）一三五頁には臨時全国宝物取調局の在任期間は明治二十四年（一九八一）から同三三年（一九〇〇）と記載されている。

（13）東京国立博物館編『生まれ変わった法隆寺宝物館』（東京国立博物館、一九九九年）三〇六頁

（14）蜷川式胤、米崎清美『蜷川式胤「奈良の筋道」』（中央公論美術出版、二〇〇五年）一七四頁

（15）大沼宜規著、日本近代史研究会編「小杉榲邨の蔵書形成と学問」『近代史料研究』所収（日本近代史研究会、二〇〇一年）五頁、図1の①

（16）注（16）五頁、図1の⑱

（17）久松潜一、山崎敏夫、後藤重郎校注『新古今和歌集』（岩波書店、一九五八年）三九頁

み吉野は山もかすみて　しら雪のふりにし里に春はきにけり　　攝政太政大臣

ほの〴〵と　春こそ空にきにけらし　あまのかぐ山霞たなびく　　太上天皇

〈参考文献〉

正倉院事務所編『正倉院寶物』（毎日新聞社、一九九四年）

東京国立博物館編『法隆寺献納宝物』（便利堂、一九七五年）

東京国立博物館編「金銅小幡」『法隆寺献納宝物特別調査概報』（東京国立博

物館、一九九二年）
東京国立博物館編「木漆工」『法隆寺献納宝物特別調査概報』（東京国立博物館、一九九二年）
東京国立博物館画像検索
https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/index

〈謝辞〉
執筆にあたり、奈良大学関根俊一教授にご指導を賜り、資料の翻刻にあたっては奈良大学村上紀夫教授にご助言いただきました。末筆ながら深く感謝の意を表します。

図２　「大大論戯画」（1-8）

図１　鳥毛立女屏風（1-2～1-7）

図４　吹絵紙　第十六号「紅葉」（1-13）

図３　「鏡背下絵」（1-11）

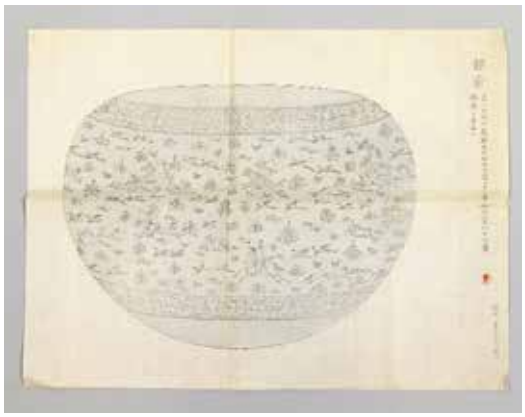

図６　銀壷　甲（1-16）

図５　銀壷　甲（1-17）

図９　紫檀木画槽琵琶
（2-25㋑）

図８　楓蘇芳染螺鈿槽琵琶
（2-25㋐）

図７　密陀絵盆　第13号（1-24）

図10　蓬莱山蒔絵袈裟箱（3-29）

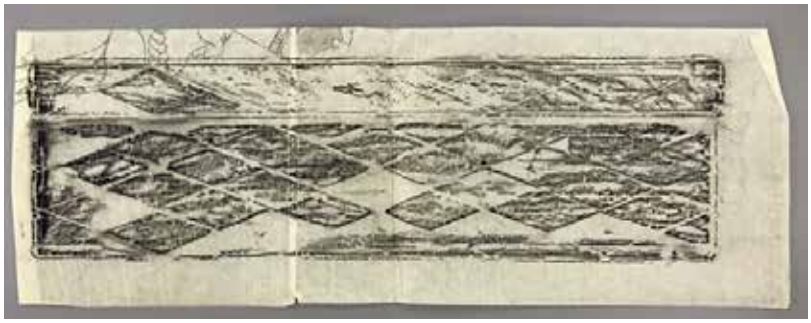

図11　木画経箱（3-35）

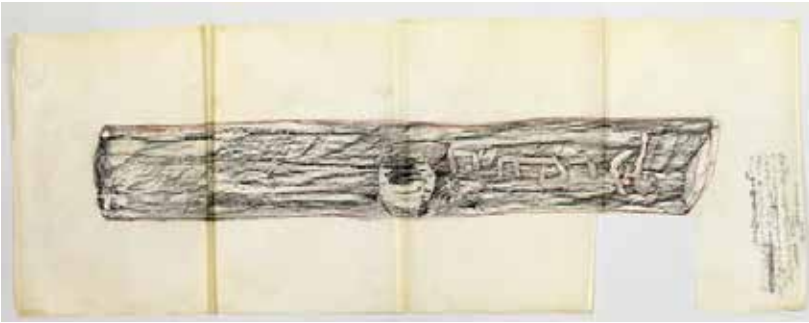

図12　白檀香（3-44）

図13　幡垂飾　金銅装唐組垂飾二条（4-47㋒）

図15　御物一覧 仏像（5-48）

図14　御物一覧（5-48）

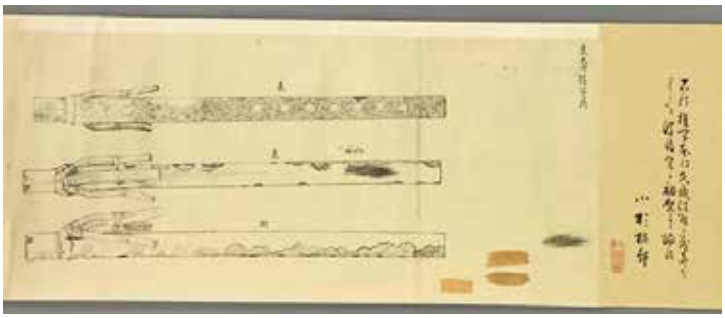

図16　斑竹尺八（7-51㋐）

図18　不明、箜篌の一部か（7-51㋓）

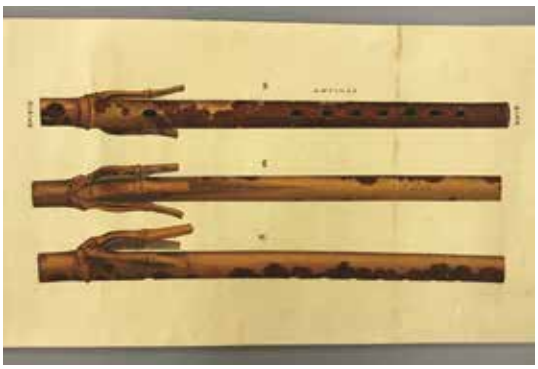

図17　斑竹尺八（7-51㋑）

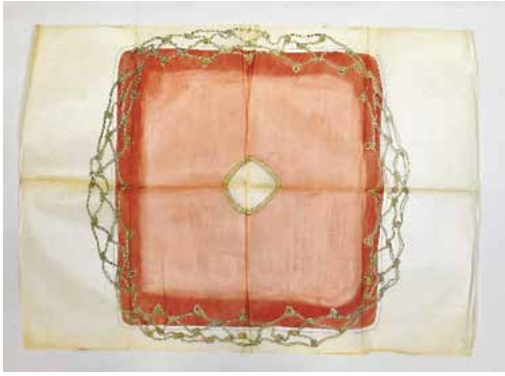

図20　天蓋模写（8-53）

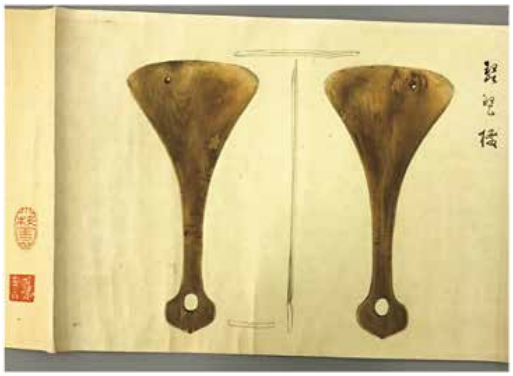

図19　不明、琵琶撥か（7-51㋔）

図22　貴族室内図（8-57）

図21　壁画模写（8-56）

表１　正倉院宝物（cm）

資料番号	登録番号	資　料　名	数量	原宝物寸法　縦×横	資料寸法　縦×横	内　容	備　考
1-1	北倉36	木画紫檀碁局	1	49.0×48.8×12.7	85.6×132.6	全体模写	蓋面と側面以外に引き出し部分を上・横・斜めから見た状態を描く
1-2	北倉44	鳥毛立女屏風　第１扇	1	135.9×56.2	21.5×25.0	顔から腕にかけての模写	
1-3	〃	鳥毛立女屏風　第２扇	1	136.2×56.2	30.1×23.9	顔の模写	
1-4	〃	鳥毛立女屏風　第３扇	1	135.8×56.0	27.8×23.2	顔から腕にかけての模写	他の図とは異なり紙が四角、腕全てを描く
1-5	〃	鳥毛立女屏風　第４扇	1	136.2×56.2	16.5×18.6	顔の模写	
1-6	〃	鳥毛立女屏風　第５扇	1	136.2×56.5	25.4×17.7	顔の模写	
1-7	〃	鳥毛立女屏風　第６扇	1	136.1×56.4	23.5×18.5	顔の模写	
1-8	中倉18	続修別集　第48巻 第３紙　戯画人物	1	29.1 ×23.0	39.5×27.2	大大論の模写	左下に墨書
1-9	〃	〃	1	〃	36.4×49.2	第３紙から第４紙冒頭２行目までの模写	付箋に鉛筆で書き付けあり
1-10	〃	続修別集　第48巻　第４紙　経師習字　臨王羲之書	1	29.7×51.0	36.0×49.2	模写	
1-11	〃	続修別集　第48巻 第１紙　鏡背下絵	1	29.2×32.0	35.5×49.7	模写	
1-12	〃	続修別集　第48巻 第２紙　鏡背下絵	1	28.9×35.7	35.7×49.5	模写	
1-13	中倉46	吹絵紙　第16号　紅葉	1	29.5×41.0	27.5×38.9	模写	右端に墨書
1-14	〃	吹絵紙　第７号　藍	1	29.5×41.0	27.4×38.8	模写	右端に1-13と同じ墨書
1-15	南倉13	銀壷　甲	1	口径42.2　胴径61.9 総高49.4	31.2×50.0	模様一部の模写と底面の文字拓本	模写と拓本右横に墨書、右下には桜井の印 印刷物
1-16	南倉13	銀壷　甲	1	〃	31.5×42.0	全体模写	右端に墨書、右下には桜井の印と小さく鉛筆で「桜井香雲蔵」とある
1-17	〃	〃　甲	1	〃	57.8×61.6	狩猟文様の拡大模写	右上紙欠損
1-18	〃	〃　甲	1	〃	57.1×63.5	〃	人物顔部分に紙が貼付され描き直し
1-19	〃	〃　乙	1	口径 42.9　胴径 61.3 総高46.6	52.6×75.0	〃	馬の後脚に紙の継ぎ足し

1-20	〃	〃　乙	1	〃	57.0×64.6	〃	左上半分欠損、馬の後脚に紙の継ぎ足し
1-21	南倉39	密陀絵盆	1	不明	38.7×41.0	模写	密陀絵盆背面の写しと思われるが何号か不明
1-22	〃	密陀絵盆　第２号	1	径38.3 高5.4	41.1×39.0	模写	
1-23	〃	密陀絵盆　第12号	1	径39.0 高4.4	42.4×38.4	模写	
1-24	〃	密陀絵盆　第13号	1	径39.2 高5.5	39.1×44.9	模写	

表２　正倉院御保存琵琶撥皮図二種　掛軸（cm）　※資料寸法は一紙ごとの大きさを表す

資料番号	登録番号（倉番）	資　料　名	原宝物寸法	資料寸法　縦×横	内　容	備　考
2-25（ア）	南倉101	楓蘇芳染螺鈿槽琵琶　第１号	全長97.0 最大幅40.5	43.9×19.7	捍撥部分彩色模写	付記から町田久成による模写である可能性
〃（イ）	〃	紫檀木画槽琵琶　第２号	全長98.7 最大幅41.7	44.1×19.9	〃	付記から秦法英による模写である可能性

表３　法隆寺献納宝物関係（cm）

資料番号	登録番号	資料名	数量	原宝物寸法	資料寸法　縦×横	内　容	備　考
3-26	49	玉帯残欠 真珠瑠璃玉荘２条	1	（１条）44.0×9.0 （２条）29.0×9.0	14.3×43.1	拓本	第１条と第２条のどちらか不明
3-27	69	蓬莱山蒔絵袈裟箱	1	（蓋）50.4×41.8×5.5 （身）49.0×39.2×4.5	53.7×76.6	拓本	
3-28	〃	〃	1		42.1×19.9	蓬莱山と鳥のみの拓本	
3-29	〃	〃	1		31.4×40.2	蓬莱山と鳥の拓本	中央上片部に詳細な鳥文様の模写の描かれた紙が付属
3-30	〃	〃	1		37.9×53.8	鳥文様の拓本	
3-31	〃	〃	1		6.4×27.3	側面の鳥文様のみの拓本	他３つと比べ拓影が濃く、寸法も短い
3-32	〃	〃	1		4.6×44.7	側面の鳥文様のみの拓本	
3-33	〃	〃	1		4.5×41.7	側面の鳥文様のみの拓本	
3-34	〃	〃	1		4.5×49.5	側面の鳥文様のみの拓本	中央に蓬莱山左と鉛筆書き
3-35	71	木画経箱	1	（蓋）37.6×19.7 （身）37.2×19.3（全高）11.0	14.6×42.3	側面（長辺）の拓本	裏に別作品と思しき模写
3-36	〃	〃	1		27.1×38.3	側面（長辺、短辺）の拓本	
3-37	〃	〃	1		27.1×38.8	蓋表の拓本	

3-38	〃	〃	1		27.1×38.6	底面の拓本	
3-39	104	尺八	1	長44.2 径2.0	25.7×76.0	拓本が２図と模写が１図	
3-40	〃	〃	1	〃	6.4×76.5	拓本	
3-41	112	梅檀香	1	長66.0 径10.5	26.7×76.0	拓本	付箋に鉛筆で書付あり
3-42	〃	〃	1	〃	26.8×75.8	拓本	
3-43	113	白檀香	1	長60.3 径9.0	27.2×76.0	拓本	中央下に観音らしき頭部図
3-44	〃	〃	1	〃	27.1×76.7	拓本	右下が切り取られ、右端には墨書
3-45	141	鋸	1	全長64.7 柄長37.5	24.7×79.1	拓本	
3-46	142	鎌	1	鎌長40.5 木柄長39.5	25.0×54.6	拓本	右上に小さく墨書

表４　法隆寺宝物模写　巻子（cm）　※外題には「正倉院御物模写」とあるが誤記と思われる　※資料寸法は一紙ごとの大きさを表す

資料番号	登録番号	資料名	原宝物寸法	資料寸法　縦×横	内　　容	備　　考
4-47（ア）	不明	不明		26.9×71.7	模写	法隆寺献納宝物の淡緑地輪繋文錦裂である可能性
〃（イ）	51	幡垂飾 金銅装唐組垂飾２条	（１条）全長130.5 幅5.5 （２条）全長22.3 幅6.0	26.9×60.4	拓本と模写	金具部分は拓本、墨書で色の指定
〃（ウ）	〃	〃		26.9×113.8	彩色復元図	
〃（エ）	60	金銅小幡　第１流	全長304.0	26.9×153.9	拓本	第４坪から第７坪は反転状態
〃（オ）	不明	不明		27.9×67.9	模写	
	不明	不明		27.9×67.9	拓本と模写	
	不明	不明		27.9×158.8	拓本	
〃（カ）	不明	不明			（オ）二紙目の両側面にある拓本	表裏が同形で一方は輪郭線のみ
〃（キ）	90	瑞花蝶鳥金銀絵漆皮箱	32×29.0×7.5	29.5×31.4	模写	右端に墨書
〃（ク）	〃	〃		26.9×37.8	側面の模写	
〃（ケ）	301	草花蝶鳥金銀絵漆皮箱	（身）33.0×33.3×6.8 （蓋）33.2×30.2×7.1	19.1×37.5	瑞花蝶鳥金銀絵漆皮箱と草花蝶鳥金銀絵漆皮箱の側面模写が各１図	
〃（コ）	〃	〃		27.0×38.4	側面の模写	

表５　御物一覧（cm）

資料番号	資料寸法　縦×横	内　　容
5-48	28.1×39.2	全16枚で構成された法隆寺献納宝物の模写、鉛筆書きあり

表６ 東京国立博物館所蔵、保管品（cm）

資料番号	資　料　名	数量	原作品　縦×横×高	資料寸法　縦×横	内容	備　　考
6-49	片輪車蒔絵螺鈿手箱	1	22.4×30.6×13.0	31.8×41.7	蓋表と側面の拓本	
6-50	梅蒔絵手箱	1	25.8×34.5×19.7	26.9×37.8	蓋表の拓本	右端に墨書

表７　正倉院保存古物図（cm）　※資料寸法は一紙ごとの大きさを表す

資料番号	社寺宝物図集	資料名	資料寸法　縦×横	内　容	備　　考
7-51（ア）	10巻	斑竹枝付笛	24.8×55.3	模写	表・裏・側面の３つに分けられ、輪郭線のみの模写
〃（イ）	〃	〃	26.8×49.3	彩色模写	表・裏・側面の３つに分けられ、彩色された模写
〃（ウ）	〃	小枝付笛	26.8×51.2	彩色模写	表・裏・側面の３つに分けられ彩色されている
〃（エ）	不明	不明	26.8×38.1	彩色模写	墨書から箜篌の装飾部分と思われる
〃（オ）	不明	不明	26.2×36.8	彩色模写	右上の墨書から琵琶撥と思われる

表８　作品不明（cm）

資料番号	内　　容	数量	資料寸法　縦×横	備　　考
8-52	天蓋の彩色模写、または復元図	1	53.6×76.7	布部分に薄く朱線で輪繋ぎ文様が描かれる
8-53	〃	1	53.7×77.0	天蓋全体が彩色され、紐部分の文様は途中まで描かれている
8-54	〃	1	54.8×79.0	天蓋全体が彩色され、右下に文様が一つだけ描かれている
8-55	壁画の彩色模写	1	32.5×49.0	彩色模写
8-56	〃	1	33.5×36.2	裏の付箋に鉛筆書きがあるが誤記である可能性が高い
8-57	貴族室内図（彩色）	1	78.1×107.8	裏に「天平時代（聖武天皇）貴族室内図」とあることから聖武天皇の室内予想図である可能性
8-58	模写	1	26.7×38.4	何らかの残欠か
8-59	拓本	1	31.0×41.3	作品の文様部分のみ拓本
8-60	拓本	1	27.9×40.0	正倉院宝物の緑地彩絵箱第31号と似た文様がみられ、別作品の下絵が描かれるが詳細不明
8-61	拓本	1	27.7×39.1	正倉院宝物の粉地彩絵箱第33号と似た文様がみられる

Summary

Illustrations of the Treasures of Shosoin and Horyuji Temple
−Focusing on materials from a certain family's former collection in the Meiji period−

Hikari KATO

I introduced the Horyuji treasures and Shosoin treasures that were formerly owned by a certain family. I then discussed the relationship between Kosugi Sugimura and the materials.

It is known that Kosugi was interested in such treasures. He also referred to the leakage of the treasures and mentioned Machida Hisanari.

It is unclear to what extent Kosugi was involved in the collection and production of the materials, and some of the reproductions were commissioned by the artist. However, considering his extensive collection, it is highly likely that these materials were also collected by Kosugi.

Keyword：①Shosoin Treasures ②Treasures dedicated to Horyuji Temple
③Survey of Shrine and Temple Treasures ④Kosugi Sugimura